

修士論文（要旨）  
2022年01月

# 話し言葉に見る日本語の倒置文

指導 青山 文啓 教授  
言語教育研究科  
日本語教育専攻  
220J3004  
趙 祥

Master's Thesis(Abstract)  
January 2022

# **Inverted Sentences in Spoken Japanese**

ZHAO XIANG

220J3004

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

## 目次

0. はじめに.....	1
1. 先行研究.....	4
1.1 日本語の語順.....	4
1.2 倒置文のタイプ.....	4
1.3 省略説と移動説.....	4
1.4 文のレベルを超える.....	5
2. データの属性.....	6
2.1 文字化のルール.....	7
2.2 ゼミの参加者のバックグラウンド.....	8
3. 倒置文に関する考察.....	9
3.1 倒置文の四分類.....	9
3.1.1 (a)主語タイプ.....	9
3.1.2 (b)直接目的語タイプ.....	10
3.1.3 (c)間接目的語タイプ.....	10
3.1.4 (d)その他タイプ.....	10
3.2 小説の中の倒置文.....	12
3.2.1 句点と読点の付け方.....	12
3.2.2 小説と実際の会話から抽出した倒置文の比較.....	13
3.3 倒置文として判断し難い要素とその特性.....	15
3.4 倒置要素と前文の繋がり.....	18
3.5 名詞が倒置される場合.....	21
4. まとめ.....	23
付録1 『硝子のハンマー』から抽出した倒置文の候補.....	I
付録2 『霧の旗』から抽出した倒置文の候補.....	II
付録3 本論で挙げた倒置文の候補.....	III
付録4 残りの倒置文の候補.....	V
付録5 文字化データ 1~7.....	VII
参考文献.....	i

話し言葉において、SOVの語順を乱して発話する現象は珍しくない。その典型的な例は倒置文に見られる。本論ではまず、書き言葉と話し言葉の違いについて言及する。最大の違いは書き言葉と話し言葉が産出される時、時間的な制約、修正の仕方が異なることである。ネウストプニー(1977)は日本語という言語では特に、日本語の書き言葉と話し言葉が離れていると述べている。これらの違いによって倒置文は話し言葉では比較的生じやすいと考えられる。本稿では話しことばの中における、倒置文の特徴を明らかにすることを目的とする。

話し言葉のデータを収集するため、ZOOMによるゼミの様子をレコーディングした。本論で扱う発話はすべて2020年05月12日と2021年05月07日の二回行われたゼミを収録したものである。また、小説からの倒置文はすべて『硝子のハンマー』(2007)と『霧の旗』(1964)から抽出したものである。

倒置文とは文の構成要素の一部が述語に後続する文である。この文末にくる部分を文の前方に移動させることが可能な文を、このような文を倒置文と呼ぶ。

例えば「そんなビール飲めないです、僕は、ね」のような文は主語である「僕は」が述語である「飲む」のあとにくる。このような文は主語タイプの倒置文と考える。

しかし、「どうぞ、こちらへ」のような文では、述語というものがない。文の二つの要素「どうぞ」と「こちらへ」は両方とも副詞的な要素である。語順を変えて「こちらへ、どうぞ」にしても可能だが、このような文は倒置文ではない。

さらに、動詞が存在しない文として、「そ、十時ころかな、夜の」のような文がある。この文の述語は「十時ころかな」という名詞句である。「十時」を修飾する連体修飾である「夜の」が文末にくる。この文は連体修飾タイプの倒置文と考える。

抽出した倒置文を四つのタイプに分類する。(a)主語タイプ、(b)直接目的語タイプ、(c)間接目的語タイプ、(d)その他タイプの四種類である。(d)その他のタイプの中は、さらに副詞タイプ、連体修飾タイプなどに細分する。収集した用例の中では、主語タイプと副詞タイプの倒置文が比較的目立っている。

続いて、小説から抽出した倒置文と、話し言葉から抽出した倒置文の比較を行う。小説の句読点の付け方は作者のスタイルに影響されるものの、先頭の文と倒置される要素の間に読点が付けれられる場合、倒置文は主語タイプの可能性が高い。さらに、倒置される要素は<名詞+は>のかたちが多い。これに対して、話し言葉を文字化するとき、句読点の付け方は文字化する人の影響を受ける。同じ話し言葉のデータでも、文字化する人が変われば、句読点の付け方も変わる。

一方、書き言葉では、話し言葉の同時発話や挿入発話の現象を文字のレベルに落とすことができない。地の文に加えられた発話状況の描写によって、読者は同時発話をイメージしやすくなるが、いずれにしても、登場人物は相手の発話を物理的に遮ることは作品のなかではできない。最後に、書き言葉では句読点をはっきりしているため、副詞が文の末尾にくる場合、それを倒置文と認定することが容易である。しかし、話し言葉では、副詞によって、先頭の文と後続する文の間がさらにあいまいになり、文そのものを倒置文として判断することは難しい。

そのため、話し言葉のデータから副詞が末尾にくる倒置文を考察の対象とした。それを見ると分かるように、「やっぱり」や「多分」のような副詞は広く使用され、多くの場合、先頭の文と後続する文の両方に修飾が可能である。「やっぱり」という副詞一つが文になる発話も存在する。つまり、副詞によって、話し言葉の切れ目がさらにあいまいになってしまう。このことから、話し言葉においては副詞タイプの倒置文の認定が非常に難しい。

さらに、強調構文を倒置した場合や、条件が倒置された場合などについて分析を加える。

そもそも、条件を表わす「ば」と主題は深く関連している。これらの倒置文を分析した結果、一文中で先行する部分に制限をかける要素が倒置されやすいことが分かる。連体修飾タイプの倒置文も、倒置される要素が集合に入るメンバーを狭める機能を持ち合わせていると考える。

最後に、主語タイプの倒置文の中で、助詞が省略される発話について考察する。話し言葉にはもう一つあいまいなところがある。それは、末尾にくる要素の助詞が省略されたのではなく、単に最後に付け加られた要素という可能性である。一つの発話の末尾にくる要素が、最後に付け加えられたかどうかを認定することは難しい。少なくとも、本論の文字化データでは、それを明瞭に判断することはできない。このような倒置文において、倒置される要素は名詞あるいは指示代名詞である。さらに、一文中で先行する部分の動詞の後続する助動詞と、省略される助詞と深く関わっていることも明らかにした。

結論からいうと、今回の話し言葉のデータの中では、副詞タイプの倒置文と主語タイプの倒置文がもっとも目立つため、それを中心に分析を試みた。副詞タイプの倒置文そのものを倒置文と認定することが難しい。さらに、連体修飾タイプの倒置文の中に、集合に入るメンバーを狭める要素が倒置されやすい。残りの主語タイプの倒置文では、倒置される要素のなかの助詞が省略される倒置文が多い。一文中で先行する部分の動詞の後続する助動詞と省略される助詞とが深く関わっていることにも論じた。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ(2019)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)改訂版」
- 神尾昭雄／高見健一(1998)『日英語比較選書2 談話と情報構造』研究社出版
- 金城克哉(1994)「談話の中の倒置文~会話分析による試論~」琉球大学学術リポジトリ
- 串田秀也／平本毅／林誠(2017)『会話分析入門』勁草書房
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 黒田成幸(1980)「文構造の比較」『日英語比較講座 第二巻 文法』大修館書店
- 高民定(2021)「日本の外国人居住者の言語環境と談話管理：接触場面における「言いさし」の分析を中心に」『千葉大学国際教養学研究』5巻 pp. 33-54
- 白川博之[監修]／庵功雄／高梨信乃／中西久実子／山田敏弘(2001)『中上級を教える人のために 日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 鈴木宏昭／鈴木高士／村山功／杉本卓(1989)「書くこととコミュニケーション」『教科理解の認知心理学』 pp. 39-48
- 中田智子(1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10(1) pp. 52-62
- ネウストプニー, J.V. (1977)「日本語の中の書き言葉の位置」『現代作文講座』明治書院
- ネウストプニー, J.V. (1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
- 樋口万喜子(1998)「無助詞の機能：感情・感覚を表す文の場合」『横浜国大言語研究』16号 pp. 36-44
- 平河内健治(1986)「日本語の格助詞省略について」『言語研究』89号 p. 130
- 堀口純子(1991)「あいづちの研究の現段階と解題」『日本語学』10(10) pp. 31-41
- 松岡弘[監修]／庵功雄／高梨信乃／中西久実子／山田敏弘(2000)『初級を教える人のために 日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 森浩一(2020)「吃音(どもり)の評価と対応」第120回日本耳鼻咽喉科学会総会シンポジウム
- 貴志祐介(2007)『硝子のハンマー』角川文庫
- 松本清張(1964)『霧の旗』角川文庫 1977 改訂
- Hymes, D. (1977) *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach* Routledge
- 『ことばの民族誌——社会言語学の基礎』唐須教光 [訳] 紀伊國屋書店, 1979